学びの風便り

リーディングスクール通信 55　R7.12.1

発行：松本市教育委員会　教育研修センター

学びの改革のあゆみ　旭町小学校・梓川小学校

旭町小学校　「やりたい」を支える学校へ、対話のシンカ

旭町小学校は今年度、**「自分の願いや目的を、自分たちの力で解決し、くらしや学びを創る」**ことを軸に、学校が一丸となって教育活動を進めてきました。特に、運動会や音楽会などの行事は「プロジェクト型」へと刷新し、子どもたちの「やりたい」という願いをもとに、教師がそれを支える環境づくりに注力してきました。

「チーム旭町」のシンカを目指して！

この一年間の実践を、来年度さらに力強いものへと「シンカ（進化・深化）」させるため、11 月 26 日、全職員による「ラウンドスタディ研修」を実施しました。**テーマは、「育てたい子ども像」**について。「こんな子どもは嫌だ」「こんな子に育ってほしい」という本音の語り合いから始まり、最終的には「**そんな子どもが育つのは、どんな学校？**」という、学校づくりの核心に迫る対話を行いました。

今回は、ファシリテーターを、これまで牽引してきた研究主任の金宇先生ではなく、坂口先生が務めました。初めて全体進行を担った坂口先生は、**職員室に流れる「温かさ」を再発見**したそうです。どのグループでも「うんうん」「そうだよね」と頷き合い、「それってどういうこと？」と問いかけ合う姿。これは、プロジェクト型学習や対話型の研修、隔週金曜日の「あさひ T タイム（おしゃべり会）」などで**積み重ねてきた共通体験が、確かな心理的安全性（ナイスな関係性）を育んでいる証**でした。

一方で、坂口先生は対話の深まりゆえの難しさも痛感しました。熱を帯びた議論を時間で区切る辛さを、「図工で夢中になっている子に『はい終わり』と言うあのもどかしさに似ている」と表現しています。また「そんな子どもが育つのは、どんな学校？」の問いかけた際、現実的な課題が先生方の頭をよぎったのか、それまで活発だった対話が一時停滞する場面もありました。金宇先生はこれを「合意形成の生みの苦しみ」と捉えています。しかしあえて結論を急がず、互いの理想や教育観を交流する中で見えてきたものは、「心・時間・もののゆとりの必要性」というキーワードでした。**大人がゆとりを持ち、互いを認め合う姿があってこそ、子どもたちが安心して「やりたい」にチャレンジし、成功と失敗を学びに変えながら、互いを思いやることのできる学校**になる。それが今回全員でたどり着いた共通認識です。

「チーム旭町」の成長を実感！

今回の研修は**「チーム旭町」の成長を示す機会**ともなりました。慣れた研究主任が前に立つのではなく、初めての先生が場に立っても、周りの職員が自然と良き「サイドワーカー（支援者）」となり、場を支える空気が生まれていました。「完璧な研修もいいけれど、隙のある研修もいい」そんな金宇先生の言葉通り、**誰が中心になっても支え合える関係性**が、旭町小にはあります。

「何をすべきか」という手段だけでなく、**「どんな学校でありたいか」という理念で心を通わせたこの時間**。そこで生まれた「**気持ちの統一**」を核として、旭町小学校は来年度も、子どもと共に、さらに面白く温かい学校を創っていきます。

梓川小学校　　その子がその子らしく学ぶ探究的な授業を目指して！

共に考え、語り合い、学び合う学校づくりへ！　～職員研修～

梓川小学校では、今年度よりリーディングスクールとして「その子がその子らしく学ぶ探究的な授業の実現！～核となる単元を軸にして～」をテーマに、新たな挑戦をスタートさせました。今年から月に1回位置付けた職員研修を中心に、テーマを実現するために、「共に考え、語り合い、学び合う」という先生たち同士の関係を丁寧に築いてきました。

7月 28 日の職員研修では、「**卒業した6年生がつくったピザ窯を使いたいという学年があるが、本当にピザやアップルパイが焼けるか、職員で一緒に試してみよう**」と、「窯と仲良くなろう講座」を実施しました。実際にピザ窯で焼いてみる中で、おいしいアップルパイやピザをつくるためには、火加減がポイントだと気づき、「何度くらいがちょうどよいか」と試行錯誤を重ねるなど、先生たちの探究的な学びの姿も生まれました。9月の初旬の職員研修では、学年を超えた4人グループで「**探究的な学習をどのように構想していったらよいか**」について共に考え、語り合い、学び合いました。

6年生の総合的な学習の時間　～　学年マルシェ　～

6年生では、これまでの研修で提案された先生たちのアイデアを受けて、核となる単元「学年マルシェ」を実践しています。1組は「リサイクル品を使ったおもちゃづくり」に、2組は「アップルパイづくり」に、3組は「自分の育てたい野菜づくり」にそれぞれ取組んでいます。活動の一つのゴールは、自分たちのつくったものを「学年マルシェ」で販売すること。「学年マルシェを成功させたい」という共通の願いをもってそれぞれ準備を進めています。

アップルパイを焼く子どもたち

6年2組では、「**梓川名産のりんごを使って本格的なものをつくり、梓川のおいしさを伝えたい**」との思いで、職員研修で試したピザ窯を活用し、「アップルパイづくり」に励んでいます。試作の過程で、丸山菓子店さんのアップルパイと比べてみると、「味の深みが違う」ことに気づき、「もっとおいしいアップルパイにするには？」と、子どものたちの探究心も自然と高まっていきました。12 月の学年マルシェに向け、「今までお世話になった人たちに、自分たちがつくったアップルパイを食べてもらいたい」と、心を込めて試作を重ねています。

教科横断的な学び　～算数「比とその利用」～

ゆるキャラを見せ合う子どもたち

6年生の先生たちは、算数「比とその利用～比のよさって何だろう？～」を、学年マルシェと関連させた教科横断的な学びとして構想しました。導入では、今年も学校の梅でつくった「梅ジュース」を題材に、「梅シロップと水を混ぜる割合」を振り返り、「**どうやったら注文がたくさん入ってときでも速く正しく提供できるか**」を考えながら、「比の意味と表し方」について学びました。

11月18日、学年マルシェの成功に向けて、「**学年ゆるキャラ考案グループが考えたキャラクターが、よりかわいく見える比はいくつだろう？**」を追究する授業を公開しました。子どもたちは「よこ:たて」の比を自分たちの好きな比に変えて、ゆるキャラづくりに取組みました。「よこ:たて＝5:7」などと自分で比を決め、楽しそうにキャラクターを描く子どもたちの姿は、「自分がよりかわいいと感じるキャラクター」を求めて探究する姿そのものでした。授業後、担任の小林先生は、「**これまでの『やらされる算数』から、子どもが『自らやりたいと思える授業』にしたい**」と挑戦を語りましたが、まさに、その思いが、子どもたちの姿に体現された授業となりました。学年マルシェ当日に向けて、さらに「顔と胴の比率」を変えるなど、「かわいいキャラクター」を目指し、比の授業を通じた2組の探究は続きます。

梓川小では、「その子がやってみたい」という気持ちを大切にし、子どもの姿を思い浮かべながら、職員が共に考え、語り合い、核となる単元を軸にした探究的な授業づくりにチャレンジし続けています。